



吉村明道
編輯

近世太平記
三篇

中

5 伊 引
3994
8



伊
3994
8

近世太平記三編卷之中

目録

- 一 官軍田原坂の壘と抜て植木ふ進む事
- 一 熊本城兵京町に賊より迫り苦戦の事
- 一 木留口進撃八人隊高名の事
- 一 八代に官軍小川の賊を破る事
- 一 福岡乃賊徒暴発の事
- 一 八代の軍松橋ふ進み賊伐敗る事
- 一 七本山鹿の軍連ふ賊伐逐ふ事
- 一 福岡の賊徒敗滅は事



- 一 中津の賊謀叛を企てる事
- 一 中津に賊大分縣廳を襲ふ事
- 一 八代乃軍屢賊を敗る事
- 一 三方の軍連ふ賊壘を陥る事
- 一 賊將別府新助新兵隊以て八代を迫る事
- 一 熊本籠城苦辛の事
- 一 奥少佐熊本城に圍を突く宇土に達する事
- 一 七本山鹿の軍連ふ賊の數壘を破る事
- 一 宇土の軍川尻大進撃の部署を定る事
- 一 諸道に官軍熊本城に連絡を通ずる事

- 一 官軍兵を分て三面包撃の策を爲る事
- 一 帶山に官軍激戦の事
- 一 官軍鹿兒島に發向して朝旨を諭す事
- 一 賊兵天部と退き二道に分ちて潰散する事
- 一 岩村縣令士民を撫諭する事
- 一 賊兵鹿兒島の官軍を迫る事

Blank page with vertical lines for text.

近世太平記三編卷之中



官軍田原坂の壘と抜て植木に進む事

斯る所も三月十九日、大山少將野津少將、大木將校と木の葉に本營を會し、攻撃の方略を議するや、我兵の田原坂を攻るや、茲に十有七日、その間日夜接戦し、殆ど虚日あることあり、然るも賊兵慄屢敗軍をうと雖未だ其鋒と挫がば、嶮に據て死戦せり、さきより力と以て之を攻ると、きの徒る兵と損ぜんもの、さきよりして熊本之城兵、嬰守まゝ、おと既ふ二旬餘不及べ、日お援軍の至るを望ん、我輩大

兵と擁し、日々曠り、熊本とて敵と與し、何の面目あり、まゝ天下の人と見んや、明日將ふ大舉して攻入る、速ふ熊本の圍と解んと、諸君乞ふ努力せよと、將士皆奮て之と賛ま、是ふ於て守壘の兵ふ令し、安ふ進むことと禁し、全軍と分て三と爲し、第一の敵陣と衝く、植木ふ達せしめ、第二軍の之と繼ぎ、第三軍の游軍とて、部署既と定りけし、俱ふ明朝五時と期し、進撃せしむ、是夜雨大ふ至る、二十日の曉と及て猶止ざりしが、午前五時諸隊と集合し、六時其第一軍の二隊より、谿と渡て、植木と田原坂の間ふ出て、敵の横と衝き、以て街道と冲断せん、時ふ雨益

強く、大霧冥蒙とて、咫尺と辨むべからず、我軍直ふ賊の壘下と達し、巨砲と放つ、おと三發大と叫んで進り、賊兵大雨と恃で備へざる、倉皇措く所と知らず、漸く壘ふ循て砲撃せり、我軍敢て却るは、銃槍と装し、戦隊と作て、齊く壘中に突入し、賊兵大ふ敗れ、壘を捨て、潰走を我軍遂に街道の砲壘と拔き、賊と斃せり、數百人屍の積て、壘々たる、士官の皆令旗と揮ひ、衆と勵し、曰く、戦勝するんを、進て植木の賊據と拔さるやと、諸隊奮進、逃るは追て、植木ふ入る、植木れ賊の固より恃で思ふや、地嶮ふ、兵勇なり、官兵強しと、雖何ぞ能く之と踰んと、既とて敗兵遁

を還て狀を報りけり、賊兵周章狼狽する間、官軍早くも驛へ入り、火を人家へ縱ち、呼譟して之を迫り、賊怖れて防がんと能はず、遂に其本營を棄て走る。我軍尾撃して向坂へ至りけるが、賊隊を整理して、回り撃つるに、我軍之を邀へ交戦稍久し、是より先、賊兵の田原坂本道の壘及び横平山へ對するの壘をとり、その中央既へやぶりと雖、抗戦して敢て退らざりしが、須臾より兩所の壘共に砲聲を聞がりけり。我兵横平山より進で直に入けるに、空虚一兵と見せ、既へして本道の賊壘も亦銃を發せん稍遁を去れ策とるせり。我兵之を知り、兵を進めり、賊兵一彈を

發せん、四散して潰ゆ。士官某挺進して壘へ攀登り、旗を揮て兵を麾けば、我兵遂へ進で之へ入り、其本道の敗賊へ、谷と渡り岳を踰え、漸く向坂へ抵りけるが、戦正に酣るに、けり、遠へ兵を集て横へ我軍に打かけり、我軍へ二面敵に當り、戦尤も苦む。是へ於て、徐へ軍を收て、植木の北に退き、戦線は張て之を守り、終に營を七本へ建りけり。此役小賊を殺ち、總て三百餘人、大砲四門、小銃百挺、刀劍彈藥若干を得り、さきど我兵に死傷は甚と少りと。是より先、熊本に賊へ、敢て城へ迫らず、城兵も亦守地へ據て敢て出で、相持して十七日より十九日へ至りしが、是日賊

兵京町より進で我胸壘と砲撃をりて尤も厲し城兵の
 野砲營と守るもの之に應じて發射し遂に賊兵退けり
 廿一日岩村の軍は田原坂の捷報を得て直に兵を部署し
 拂曉三路より進すが右翼は兵を撃て山伏峠を抜き、
 傘峰を取り賊は志々岐村に據るものや下し射り、既に
 中央左翼の軍は進で鍋田村に克て賊陣を燒き、長驅
 山鹿に入ける、賊は到る所悉潰走りり、我軍直
 一戦營と山鹿に移し兵を分て、一は賊の隈府に走る者、
 尾撃し一は駐て山鹿を守り、一は三浦少將自ら將し、
 行々賊と討て植木に進り、是日七木の軍は賊は植木に出没

まゝ者や撃て之を走らせけり、

熊本城兵京町の賊に迫り苦戦の事

爰に熊本城の賊は廿一日砲を我胸壁に發して、頻に戦と挑
 めけるが城兵應せん、是日小島大尉部下と率て段山近傍
 の地を出て糧を聚めり、賊の藏る所の小銃若干を獲
 り、廿二日城兵の飯田丸と守るもの、白川堤に賊兵と戦
 ひ須臾おし休む、廿三日城兵曉を冒して日向崎に賊壘
 を撃ける、賊兵狼狽して潰散しけり、城兵之を尾撃せ
 し、偶天才不明る、あひ其胸壁を毀ち兵を收て城中に
 還る、越て廿七日に至り、午前四時、台兵と警視隊と左右

とう京町口よちぐちに向むかひ別べつの一軍いっぐんを遣やり迂回うゐんかいして牧崎村まきざきむらに出いで
 じむ既すでに我本道わがほんだうの兵進へいしんで賊の胸壁むねがきを突つけし所賊誘しやく
 て夾擊くわうげきせんと欲ほつし詐しやうて遁のがれ走れり我兵之わがへいこれに乘のりいで其第そのだ
 二壁ふたかきに迫せまる比伏兵ひふくへい左右の胸壁むねがきを據とり狙撃そげきし相距あひだること
 僅わずかふ七八間しちはつげん我兵三面敵くわんてきに當あり頗まる苦戦くせんを士官しうかんは銃じゆを持も
 ざる者ものへ皆瓦礫かたがらを採とりて投なぐるに至いたり時ときは九山くやま大尉だいうは
 部下ぶかを率いそぎて來きり援えんふる會あひ我兵之わがへいこれに力ちからを得えて激戰げきせん四時
 間許かんたひ時ときは賊てきは市中しちゆうの倉庫くらに入いり窓中まどちゆうより下くだり射やり
 ぐ我兵わがへいは巨砲きよほうを發はつし之これを碎くだき午後二時ごふにじに至いたり賊兵少てきへいすく
 しく却かへり因より我兵本道わがへいほんだう右翼みぎよく齊いっく進まり胸壁むねがきを拔ぬき八箇所はつかんと

逃にげし逐おつて京町きやうちゆうに至いたり火ひと人家じんがに縱たち胸壁むねがきを築まりて守備しゆび
 せ張てり午後七時ごふしちじ戦止せんぢむ是これより先別軍せんべつぐんの牧崎村まきざきむらに進しんむ
 の途と中ちゆう賊てきは哨兵せうへいを逢あひ我兵敢あて銃じゆを發はつせむ疾やくく馳ち
 て一二いちにれ敵壘てきらいを過すぎ直ちに牧崎村まきざきむらに入いり賊兵胸壁てきへいむねがきを據とり
 拒撃きやくげきを我兵之わがへいこれに應こたへず遂ついに奮進ふんしんして壁かきに迫せまりけし賊
 兵守まもり捨て走はり我兵尾わがへいびして之これを破やぶんと欲ほつし衆しゆうを督とくして
 之これを逐おつける所須臾しよじゆに花岡山はなやまに賊兵之てきへいこれを援えんて返戦へんせんし
 銃砲じゆほうを發はつせり尤なほも厲げし此時このとき我後軍わがごご一小隊いっせうたい亦また來きり援えんひ
 けし乃なほ兵へいと左右さゆうを分わち相翼あひよくして進しんむるありし賊てきの
 胸壁堅牢むねがきけんらうにして容易やすに拔ぬべからざる午後七時ごふしちじ亦軍またぐんを

收て城中に還る。我兵の死傷頗る多し。是日神戸の海軍事務司と長崎に移し、石黒陸軍々醫正の醫官及び看病卒若干人、我率て大坂より肥後へ赴けり。

木留口進撃八人隊高名の事

斯て二十二日、七本の軍ハ、すこ植木の残賊を撃けり所三浦少將ハ、既ハ山鹿に賊と討て來り會せり。時ハ官軍既に田原坂に嶮と奪ひ、全勝の勢、攻制まじ、雖賊兵驍悍ハ、敢て遠くさらば、僅ハ退て植木の南に陣し、地形ハ猶て壘と起し、鳥の栖と右翼とあり、木留と左翼とあり、線狀偃月の如く數里ハ亘り、死守奮戦以て我軍の熊本ハ入と拒ん

し、すこバ官軍遂ハ進で旅團本營と、七本ハ移せり。七本ハ田原坂を登りて、廿餘町の所ハ在り。七本ハ西半里ハ一て、味取町あり、山鹿に至るの中央より、官軍兵を置て間道より、互に往來し、以て山鹿と通ぜり、因て高瀬と願ふの患あり、故ハ内田玉名の守兵を止む。是ハ於て、我戦線と短縮し、守備大ハ固し、二十三日、七本の軍ハ、三方齊く進で賊壘に迫り、右軍が水留に賊を撃けるが、賊兵險ハ據て防戦し、我兵死傷尤も多し、退て守地ハ復し、中軍漸く進で賊に向坂ハ戦ひ、夜ハ入り軍を收り、さして別軍の原倉よりする者ハ、遙ハ横平山の兵に應じ、横ハ敵壘を撃ける所、賊兵健闘

して能く防ぎ、我兵抜去と能く退いて退く、二十四日七本
 其兵ハ軍議を定め、木留を抜んとし、植木の兵を令し
 て、擅に進むことを禁じ、左軍を進めて、敵壘を衝き、連日數
 壘を陥れ、遂に木留を迫りしが、二十五日に至り、賊昨日に
 敗軍を憤り、死士數百人、曉霧に乗じ、抜刀奮進して我陣に
 突入りければ、我兵大に敗れ、走れり、將校士官皆劔を揮て衆
 と叱咤し、漸く隊を整て返戦する事終日辛うして守地に
 復せり、此夜賊兵十人餘を我陣を襲ひしが、守兵撃て之
 を卻く、二十六日七本の軍ハ戦線に固く守て敢て進まず、
 午後一時木留の守兵砲を敵壘に發して戦を挑むと、賊

兵直に銃砲を連發せしむ、我兵奮激して之に應ぜり、時
 に廣島鎮台十一聯隊の兵僅に八人、彈丸を冒して挺進し、
 散兵となりて壘下に達し、其進退の巧き人皆目を注げ
 り、須臾にして八人大呼銃槍を揮て突入り、賊兵十三人々
 殪して、其壘を奪り、士官之と感し、近づいて其姓名を問
 ふ、皆答て曰ふやう、死して後不知ることあらんと復言
 ふ、是より軍中八人隊の稱あり、我兵之を見て、呼譟齊く進
 ん、頻に數壘を抜き、殆ど木留町に近づき、守備を張て兵を
 收む、植木口も亦賊を走らし、大に戦線を進めり、廿七日、
 七本の軍大砲を以て植木木留を撃射し、並に其人家を燒

けと、賊兵其據る所と失ひ少く陣と退き、我兵敢て輕進せ、廿八日、まゝ植木木留を撃けども、壘固く、
く拔さりけり。

八代の官軍小川の賊と破る事

諸も八代の官軍の、廿二日、宮の原に進み、賊兵と種山早尾山等、戦ひ、互に勝負あり、廿三日、拂曉、我軍兵と分て二々なり、一は其背後に出で種山と衝き、一は宮の原の本道より進み、兩軍交戦し、午後三時、至り、我軍奮進、遂に其壘と陷き、賊兵と走らせり、是に於て軍を收て、哨兵を配布せり、賊又襲來まば、哨兵邀へ撃く激戦し、暮及で賊

と走らし、漸く守線と復せり、此役賊を斃せ、數十人、我兵に死傷も亦多し、廿四日、又賊と宮の原に戦ひ、勝敗決せ、是時、小當て、我戦線種山より氷川に至り、廣さ數里、不跨り、寡兵と以て守るべからば、因て兵を勒し、暫く後軍の至ると待し、廿五日、山田少將、川路少將、兵を率て八代に抵り、けき、明目と以て大に進撃せん、乃ち別働旅團を制定め、高島大佐、第二旅團を領し、山田少將、第三旅團を領し、川路少將、第四旅團を領し、廿六日、宮の原、鏡村より進で、賊を撃ける、すぐ第四旅團、中央より進み、第三旅團と右軍と、第二旅團と左軍とせり、時、小砲兵未だ至らば、因

て巨砲と軍艦より輸送し、軍吏の砲と能き者を選で一隊とし、折田開拓少書記官之と督し、左軍小合して進み、午前七時大砲を發せしこと三たび、續て左軍の鯨波と揚げ、撃て虚勢を示し、右軍の疾く進で賊小當り、中央之小次く、賊亦烈く防戦せしが、既にして左軍奮闘して進み、中軍右軍之と見て、呼聲齊く進み、其聲天地に震ふ計りありしが、賊遂に支ひ敗走せり、さきより總軍急小追て直小川の要を占む、午後三時戦罷けしに、哨線と張て兵を配し、第三旅團の宮に原小陣し、第二旅團の鏡村に陣し、第四旅團の小川小陣して、兵を收む。此役我兵死傷頗る多し、是日山川大佐

砲工兵を率ひ、長崎を發して亦八代小赴けり、廿七日の戦線を守りて進む。廿八日、斥候兵と出さんとして、中村中佐別働第二旅團の兵一大隊を率て、豊橋村を過て、切通小至り、此賊兵小遇て戦ひしが、我兵利ありて退り、小川を保り、死傷凡四十人餘なりと報ん。

福岡に賊徒暴發の事

茲に筑前福岡の士族越智彦四郎建部小四郎久世芳磨等其黨を集て叛せり、初め薩賊の起るや、福岡の士族西郷と信むる者頗る多し、因て兵を擧げ之小應せんと謀むる、偶總督宮に本營と此小置に當り起て之と襲んとせしが、官兵

大子至る小會ひ其計と止めり、さきとも肥後の園未ど
 解む、兩軍植木鳥に栖の間、數日相持し、賊軍容易に敗れ
 ざるを見て、再び叛と圖り、越智等の數人黨と集て議する
 中、薩兵強梗官軍之を征する事と既し、二旬餘未だ平定
 不至らば、我輩此機に乗じて兵を擧げ、佐賀又留米柳川に
 士族も亦必だ起て我に應ぜん、前後夾撃彼をして志を一
 方小檀にさるること能はざらざら、我輩は事成ると衆こ
 ろ之と然ることを乃廿七日の夜二時を期し、城を襲て其彈
 藥を奪んとす、期ふ至て集る者凡四百人分て三隊とす、
 城北三方より來り襲へり、時小城中の兵僅し一中隊賊の

進むを見て砲を備へ一撃數十人と殪しけり、賊怖れて
 敗れ走る、火を大西吉村等不縦ち、區務所の金一万圓を奪
 て去る、因て市民等騒擾負擔して、乱れ東西を避るふ至
 る、縣官直に巡查を集て守備を為し、廿八日、官兵城を出
 て、其所在を搜索しける、賊徒遠く遁て、野毛に屯せし知
 り、進で之を攘んとす、適大坂鎮台兵一中隊博多に抵りけ
 る、品川中佐平佐大尉之を率て、野毛に發せり、野毛はも
 と福岡藩士の采地小係るとりて、土人竊に心と賊に寄せ
 れば、官兵地理を尋る、詐り答て云る中、近傍に一賊な
 り、乃兵を進て野毛に入ける所、賊不意に起て、我横に撃

近世大平言



近世大平言



筑前の國
博多洋の
國

福岡の暴徒
越知彦四郎
久世芳六郎

卷之中

けをば、官兵利あらば、少く退きけり。既にして、大坂鎮台兵博多に抵り、急を聞て來り援ひけり。遂に兵を合して、賊を走らし、日暮て軍を收め、賊亦曲淵に退きしが、廿九日、黎明品川中佐一隊を率て曲淵に迫り、一戦之を走らせし。賊復遁て金武に集り、けをば、官兵三道より進けり。水道の兵、土人の爲に欺き、伏し遇て敗走せり。さても賊兵敢て尾せば、火を人家に縱て退きしが、三十日、賊も金武及び曲淵村に籠り、けをば、官兵分まき、之を撃つ。其一軍は午後進で金武村の賊を走らし、逃りて追て那美村に至り、その曲淵村に向ふに、兵の内野村より賊に迫

りけり。賊死戦して朝より暮に至り、けをば、我兵奮て其巢窟を陥り、賊遂に走て行方を知りしが、三十一日、肥前に入り、路を三瀬村に取んとす。時、長崎縣の巡查邀へ討て之を走らし、賊又遁て田代驛に據まりとす。

八代に軍松橋に進で賊を敗る事

さる程、八代の軍は別働旅團の名稱を改め、第二を以て第一とす、第三を以て第二とす、第四を以て第三とす、しより、二十九日、別働戦艦をして、出水より河内に至るの沿岸を廻航し、時、賊據り砲撃せしむ。玄武矯龍の二艦も、亦太田尻三角近傍の瀬海を航し、陸地の賊を砲撃

せり、三十日大舉して娑婆神口及び松橋を攻んとし、議
 て曰く、第三旅團の娑婆神の賊を攘ひ第二旅團の機に乗
 じて、豊橋より松橋に進み、第一旅團の海濱に循て進み、第
 二旅團は松橋に入るを見て、三面敵軍を突き、以て一合
 まべしと、拂曉第三旅團進で娑婆神の賊を撃けり、賊は
 山間に險を據て拒守し、又兵を迂回して我右を撃ち、我兵
 尤も苦戦の所第一旅團の兵一中隊馳く之と援く、賊亦防
 戦愈烈し、因て川路少將自ら兵を督し、迂回して斜に賊背
 と衝けしむ、賊顧て披靡せり、本道は軍之を見て、直に奮進
 賊と走り、遂に其險を取れり、時、午前第十一時あり、第

二旅團は已に豊橋切通を取り、進で賊を撃つる、賊亦山
 間を扼し、防ぎ、我兵進むと能く、されば山田少將自
 ら兵卒の外を被り、乘り先を進み、叱咤し、戦ひたり、是
 より先第二旅團も亦鏡村より海に沿て、賊を迫り、乘り、
 賊は新田の水門を毀れ、海水を引き、以て我を阻ん、我
 兵潮水を冒し、進り、此時左右中央とも戦既に酣ま
 し、勝敗未だ決まざれば、山田少將衆を勵み、撃つ賊陣を
 敗れ、逃るを逐て進み、安田権大書記官砲隊を督し、本道
 より賊兵を追撃し、諸隊齊く呼譟し、進み、砲煙天を漲り、
 呼聲山谷を震ひ、敵兵大に崩れんとし、三道の軍之を乗

賊兵と走り其壘を抜き、午後七時戦ひ罷む。此夜雨大至り、四面暗黒をりりれば、總軍野營し、夜の明るを待ち、三十一日、三道より進撃せし、賊兵の我右翼は當るもの、尤も強梗より、接戦稍久し、本道右翼の軍は、其隙を乘じ進み、松橋に入りれば、賊兵周章し、器械彈藥を捨て走れり、乃哨兵と松橋より、宇土に至るの中央は布る軍を收り、是日、主上の大阪の鎮台營は行幸せられ、其病院は臨み、親く負傷の將士を慰問せらる、初め車駕の發するや、午前七時より、三條太政大臣、木戸内閣顧問、自餘の諸公之は隨ひ、七條停車場より、瀛車を召れ、大阪鎮台に入り、病室は

就て、親く創傷を見玉ひけるが、石黒陸軍々醫正、昨夜中尉某は病で死するに狀を奏しけり、主上涙を垂て悼み、玉ひ又兵士の病室に就て懇く慰諭せらるれば、兵卒の病牀におありの、恐懼して措く所を、知次起坐して拜せんとせしが、主上之を留め勅して曰く、創傷を害するは勿きと、士卒皆感涙を流さる者なり、夫より本營に入せられ、軍醫と御前より召て、死傷人名録を御覽せらる、午後二時、行在所へ還御し玉ひけり

七本山鹿の軍連、賊と逐ふ事

是時七本軍の明三十日、期し、大舉して賊壘を陥んと

其前日令と下して、諸隊の進撃を止め、議して其嚮ふ所
と部署し、三十日、曉雨を冒して、山鹿の軍と共に進撃しけ
るが、一軍の原倉より迂回して木留に向ひ、一軍の三の嶽
を繞り、頂上の賊壘を迫ると、又山鹿の軍の味取を守り
ぬ兵を分て、鳥の栖に進ましむ。既にして兩軍戦ひ起ると
然るに原倉より進む軍の木留を攻て克む。因て三の嶽に
向ふ軍の退て守地を復し、味取の軍も亦鳥の栖を攻て拔
こと能む。是を於て山鹿の軍の別れ三中队を遣り、援て
鳥の栖を攻し、進ぶ有泉村に至る所原野廣漠守るべし
ら、乃路を轉して、新町口より隈府に向ひ、賊壘數十を拔

て、既限府に迫り、賊兵迂回して我横に撃て、蒐り、
我軍力戦まじも利あらむ。因て兵を收り、此戦に賊を
殺すこと五十人、三十一日の戦線を守り進び、四月一日拂
曉原倉に兵を分て二隊とす。一は間道を経て横平山に
いで、那知村を過り、半戸山に賊壘を抜き、山上より吉次越
の賊を下し射し、一は本道より原倉の村口に出で、三の
嶽に敵壘を迫り、賊兵の防戦甚だ烈し、我兵奮進して
速に砲壘を抜き、哨寨を焼き、逃ると逐て吉次越に達し、
時に午前八時あり、賊兵狼狽器械を棄り、吉次越に本道と
三の嶽に間道より走り、我兵の勢に乗じて追撃し、遂に

三の嶽と取り、正午我兵隊と吉次越ふ整へ左右に山腹より馳下て木留小向へり、此時木留本道の我兵も亦滴水と進で賊に中軍と截り、二面合撃して火と賊壘に縦ち煙焔天と蔽ひ白日光と失へり、賊兵防ぐ所を知らず路と争て逃走せり、因て午後五時軍と收む此日、斬獲筭あふに我兵の死傷の僅に數人のこゝ、二日未明進で木留を攻む、大砲と發して、賊に屯營を焼て、三面より合撃し、吉次越の我兵も亦府より賊巢と下り射はせむ、賊兵死を以て防禦し、敢て屈せざむば、我兵攻戰まゝること久りして、終に抜こと能くぞ、三日の兵と休て進め、四日早朝山鹿の軍の兵と

南田島は進み、植木の軍も亦兵と進み、之が應援せり、相戦ふこと半日許、敵壘堅うして、陥らば、西軍各守地は復せり、是日、主上、日報社長福地源一郎と召し、親く戦地の實況を奏せり、深く之を嘉せられ、金五十圓縮緬二反と賜ひたり、初め薩賊の熊本を圍むや、源一郎西京に抵り、尋ぐ高瀬に抵り、自ら戦地と奔走し、其實況と報送し、之を東京日々新聞に掲載し、戦報採録と稱せり、是時源一郎大阪に在りしが、幾許もあぐ再び熊本を赴たりとぞ、

福岡の賊徒敗滅の事

斯く福岡の賊は、三十日の大敗に遇ひ、四散して各所に潜

伏し三十一日に至り、漸々集る者三百人餘、四月一日未
明田代を經り筑前國田原に抵り、路傍の電信柱を倒し、所
々を豪掠し、筑後の乙隈村に出入り、其時曲淵の敗兵
五十人許、那珂郡の山道を經り、御笠郡山口村に抵り、金武
村の敗兵乙隈村に據り、之を合せんと欲し、馳り馬
市を過り、所は官軍の小荷駄の福岡より久留米に至る
者、遇ひ賊兵急を迫り、護兵一人を殺し、其彈藥を奪ひ、
餘兵遁れ還り、急を二日市に宿る所の台兵に告ぐれば、台
兵報を得、直に赴き援けり、賊兵堤の下に埋伏し、其
過りを待て、中央を截んとし、我兵早くも之を知り、撤兵を

布て、四面より堤下れ、賊を撃けしむ、賊兵狼狽、銃丸も中て
死すもの半に過り、我兵勝り、乘じて迫り、撃けしむ、斬擒美
あり、遁りしもの僅に六七人、過む、既にして久留米駐防
の台兵、巡查六十人と合し、乙隈村の賊を撃けり、廣島鎮
台に後備隊石櫃より會して、前後を夾み、撃ければ、賊兵遂
に敗れ、四三島を阿弥陀峯に走り去り、我兵逃りと
逐て、甘木に至り、その巨魁村上彦十以下の八名を生捕り、
久世芳磨、江上延雄、小幡大七郎、下間新吾以下五十名餘を
皆討取り、賊の兵氣沮喪し、復爲る所なし、餘衆遁り、
てき、秋月に走り、二日官兵追撃て、之を捕りしもの

頗る多し、三日不至、又賊魁加藤堅以下、六人、秋月、捕へし、餘賊遁て寶満山、入久、後、自首して罪乞ふ、是、於て福岡の賊、全く平定せり、是日、片岡侍従、高瀬の陣に遣り、慰問せらるる也

中津に賊謀叛を企てる事

同氣相求め、同惡相濟ふと、宜らる哉、爰、豊前の國中津に士族増田、宋太郎と云る者、黨を集て、乱をなせり、其原由を尋る、宋太郎、中津田舎新聞社の編輯長なり、曾て西郷の人と爲りて、慕ひ、鹿兒島に往來せり、西郷叛を及、其友櫻井貫一郎、梅谷安良等、窺ふ之に、應ぜんこと

と謀り、或る日、安良、其交る所の後藤純平と伴て、増田を訪へり、純平、大分郡淵村の平民なり、明治二年、小民煽動して、縣廳を抗し、捕縛せらるる處せらるる所の母、老て、家小侍養へ、子孫なき由り、例照して、收贖を赦せ、家小歸る、後人の爲、詞訟代言として、偶中津小來り、西郷の兵を擧ると、聞か、安良と俱、田舎新聞社に抵り、宋太郎に面會し、ける所、宋太郎示さる、中原以下の口供を以、し、けと、純平一見して、念ふや、此一事を以て、兵を擧るの名義ありと、遂、宋太郎に、一味せり、三月廿五日、至り、宋太郎同志と會して、謂るや、維新以來、茲、十年

朝廷の基礎未だ堅らば、朝令暮改、人民守る所とらば、加之無用の土木と起し、官庫と空乏あり、重税と課し、人民の疾苦未だ此時より甚きあり、試み看よ、往年佐賀の役より、朝鮮、臺灣、熊本等の事あり、於て政府のまゝ所誰り其當と得しと云んや、此を顧むし、忠良と嫌疑し、有功の人を除んとす、奸謀既し斯の如し、我輩は此暴政府と待て、真理の在る所を依て、天然の自由と伸べ、人民の義務と盡さべし、宋太郎不省なりと雖、義舉の先導者となり、同志と共に、遙に西郷と援んとす、知らば足下等の意如何と衆に、此言と然りと、しりふ力と盡んと、獨り舊森藩の士族

某肯せしめて曰く、西郷が暗殺と名として、政府も反て尋問する、固より彼が私事にして、何を天下の利害も管せん、局外の人とて助する、名義の在る所とあらば、宋太郎語稍塞りしが、暫くして大聲一喝して曰く、奸吏の兇暴既し、國家の元老を暗殺せんことを、其理非三尺の童子と雖之と辨むべし、非を捨て理を助く、誠ふ天に従ふなりと、某まと言ふ、是ふ於て衆不約し、三十一日の夜と以て事と發せんとす、是夜中津の市中流言あり、今夜前原の餘黨近傍に潜伏するもの、起て中津に入り、火を明蓮寺に縱て支廳を攻め、警吏奔走し、頻りに撫諭し、けしむ人皆漸く安堵し、け

夜半果して彼宋太郎衆と中津の舊城外に集め、八十
 人と分て四隊とあり、一は舊城の北門より支廳に迫り、一
 はまづ市中の警察署を襲ひ、追手門より入て支廳の兵に
 合し、餘の二隊に分きて、縣吏馬淵某堀兼某の家を襲ふべ
 し、向ふ所既不定り、宋太郎自ら支廳に向ふれ、兵を督し、
 大に呼で衆を励して曰く、賊本丸ありと、挺進して馳け
 るが、衆皆之に繼ぎ、櫓木門より入て支廳に抵り、門を破り
 て、衛士を縛り、鯨波をつくりて乱入し、宿直の吏負
 驚て走り出んとす、所を賊又と聚て之を殺し、彈藥器械
 と奪て、火を支廳に縱ち退て追手門に屯せり、既にして餘は
 三隊も亦警察署を襲ひ、堀兼某を殺して來り會せり、是時
 馬淵某の遁て三位宿に走り、賊の爲に殺せり、是に於て、
 市中の豪家と劫りして、財物と掠取り、越て是月一日の未
 明中津を脱し、大分の本廳を襲んとし、合馬村に至り、用務
 所の地租金六百圓を奪ひ、又四日市の警察署を襲ひ、遂に
 立石村に宿し、けり、此時中津近傍の土民變動を時として、
 各所不群集し、富農の家を焼き、用務所を毀ち、るどしけり
 が、中津の士族等力と協せり、之を鎮撫し、巨魁數人と縛り
 て、事漸に平きり、

中津の賊大分縣廳を襲ふ事

斯て中津の賊兵ハ薩軍ハ大津に合せんトヤウハ、適警
視隊二重峠ヲ守リケレバ、議ト變トテ謂フヤ、宜ク兵ト
分テ、海陸より大分の本廳ト襲ヒ、二重嶺の軍顧テ赴キ援
ふト待ち、虚ホ乗トテ大津ホ出ベト、二日加那越ル
テ頭成ホ出デ、兵ト分テ、一日日出町より、小船ト以テ大分
の背後ホ以テ、一ハ本道より別府驛ホ進ミ、是より先
中津の巡查馳テ大分ホ至リ、變ト報トケレバ、權令香川真
一士族の壯丁ト募リ、彈藥器械ト、府内の舊城ホ聚メ、別
一巡查數十人ト濱脇ホ出シテ、賊徒の來襲ホ備ヘ、既ホ
一々本道の賊兵濱脇村ホ至リ、巡查の胸壁ト築クト見て、

直ニ銃ト發シテ戰ト挑シ、けレバ我兵念ムヤ、賊の斥候
兵ホ多ク、之ニ應トテ發砲モウコト、二三發モウマアテ敢
テ省ミ、益胸壁ト嚴ニ構ン、去ルルホ賊兵ハ偽テ東
ホ進、切の狀ト示シ、遠ニ返テ背後より突入ケレバ、我兵隊
ト整ヘ、銃ト發スルの違ル、退テ高崎山ト保チケルガ、賊
敢テ尾撃セシ、路ト轉トテ大分ホ向ヒ、折シ、海路の
賊亦大分ホ抵リ、けレバ、之ト會シ、兵ト合セテ、縣廳ト襲ン
トモ、權令香川真一、自ら縣官巡查及ビ招募の士族ト督
テ、城ニ據リ、賊ト城下ホ誘キ、一セ、銃砲ト連發シ、賊怖
モテ、迫ラレ、火ト沖の濱清池船須町等ホ縱チ、懲役場ホ乱

入、役囚と出、市中の豪家と暴掠し、濱脇村に退きた
、此時淺間艦の、瀕海と回航し、變と聞き直、別府に入
け、賊兵、驟愕、夜ふ乗、油布院より二重峠と踰、其
後、遂に大津の賊陣に投、け、この日、詔し、九州地方國
事犯の処刑と以て、總督有栖川熾仁親王に委任せら、河
野幹事小畑判事も九州に赴けり、とぞ、

八代の軍屢賊と敗る事

さて、八代に賊、凡一小隊をう、是月一日の曉、乗、
刀と揮て第一旅團の哨兵と襲、い、我兵力戦し、
之を走らし、尾撃し、宇土町と抜け、右翼の兵と、

木原山に據り、緑川に浴て哨兵と布き守備と嚴し、
既、第三旅團の兵も亦攻て堅志田と取、哨兵
線、凡四里不及、二日、賊將別府新助の兵、窺、迫、
と知り、運輸支廳と松橋、病院と松合、移、患者、長崎
に送て、豫め之が準備と有、是より先、別府新助、淵邊高
照等、鹿兒島に還、兵士と募、彈藥と聚、田原坂
破、及、桐野利秋、熊本より深見有常と遣、令、傳
て、曰、別府の新募の兵と督、鹿兒島と發、淵邊に駐
て、城下と守、是、新助の後軍と高照有常等
ム、託、諸郷の兵千五百人と大口に集、是、至、八

代の官軍既も松橋と拔き、熊本の背後より迫りと聞き、衆
 々鼓を道を急ぎて、不日ふとち我兵わがへいの後のち出でんと、三日さんじつ、賊兵あつし曉霧あけぼの
 に乗り、堅志田かぢしたの陣ぢんを襲おそ来き、事こと不意ふいに出でるとりて、我兵わがへい
 頗ま苦戦くせんあり、國分くにぶ少佐せうさの衆しゆを劬おとして奮進ふんしんし、賊彈あつし中ちゆうて
 死しし、我後軍わがごかん繼ついでて賊あつし不當あつしり、撃うて賊將あつし村田正宜むらたのまさよしを
 生擒なまぢけし、賊兵あつし怖おそるを却かへり、我兵わがへいの進しんで甲佐かすけを拔かき、或あるは
 斬きり、或あるは捕とらふるを甚まど多かし、越こて五日ごにち不な至きり、八代駐防やちだいぢゆうぼう
 の兵へい、午前まへひ三時さんじと期きし、兵へいと進しんて古麓ふるふもとの賊あつしを撃うけし、賊
 兵あつし刀やいばを揮ふるて突入つとまし、戦いくさ甚まど烈てつし、我兵わがへい潰つぶれて退ひくこと
 兩度りやうど時ときふ安田權大書記官やすだのけんたゐしきくわん等ら衆しゆを鼓こして返撃へんげきし、遂つひに之これを
 走はらせし、川尻かわしりの賊あつしも、まゝ緑川りよくがわにい出でけり、第二旅團だいにりゆうだん之これ
 と六彌太渡ろくやたわたりを邀まねへ、隄つゐに循したがつて狙撃隊そげきだいていを配くわし、臼砲うすたうを以もつて撃げ
 射せし、賊渡あつしること能あたはざりし、是夜このよ賊兵あつし暗くらく乗のりして
 上流かみながを渡わたり、我哨兵わがせうへいの左翼さよくを襲おそふの状さまを示しめし、俄とつとに轉まじて
 其右翼そのみぎよくにい出でて、木原山きはらやまを侵おそり、我守兵力わがしゆりきり戦いくさして之これに
 當あり、援兵えんへい二中队にちゆうたいと兵へいと合あはせて掩撃えんげきせし、賊兵あつし遂つひに死傷しじやう
 々棄すて去さり、我兵わがへい逃にげると逐おふと、數町かずちやう之これを斬きり、之これを捕とら
 て止とむ、是日このひ曾我少將そがせうしやうの第三旅團だいにりゆうだんの兵へいと率ひきて、宇土うとに到着たうちやく
 せり、またりし、

三方の軍連ふ賊壘を陥る事

扱も木留の賊ハ五日の未明竊小我陣を襲んとん我兵ま
 づ探偵して之を知り急小敵壘に迫りけしん賊兵周章して
 進むと能をば植木の賊之を見て色めく所て我兵亦進
 で之を撃つとバ賊兵四方に散り近傍に出没して敢て應せ
 る我兵其謀ありと慮り兵を收て守地に復せり山鹿の軍
 も天未だ明ざらぬ乘じて兵を進め攻て古閑を陥れ逃る
 と逐て有泉を抜き火と土生村に縦てま之を取らん六
 日七本の軍左右の翼を張て木留の敵壘に迫りしが拂曉
 我左翼は兵挺進して賊の二壘を抜き之に據れり此二壘
 ハ最も賊の要害とてりて賊兵力を尽して返撃するこ

と數回形もとも終に復もこの能はず是に於て我兵直
 小款迫村に進み火を賊據に縦て之を焼き正午を過て右
 翼の兵ま木留の背後に進み左翼の兵も亦陣を款迫に
 進まむ七日山鹿は軍曉を冒して田島近傍の賊壘を攻
 て悉く之を抜き午前十時進で島の栖を攻落せしが我兵
 寡少にして植木の賊兵背後を絶んこを慮り島の栖を
 退くこと十一町餘にして塩浸村に據て守備を張るるハ
 日七本の軍曉霧に乗じ木留の兵を進て戦を挑けるが時
 先鋒の兵奮進して鹿子木を出て賊の横を撃んとけ
 まば賊兵死戦して之を防ぎ戦尤も厲しきまとも我兵屈

せに、遂に撃て賊を走らし、逃るるを逐て進み、此時我右翼
 も、亦木留の本道に戦ひ、賊の高きを據り、大砲を以てま
 ちちさがすに撃つ、けきとも、我兵も亦せむ、勇進し
 て山口村を拔取り、午後三時に至り、又賊の先鋒我左翼
 の右に出で、砲撃するに頗る烈し、我兵防戦久し、日暮
 に及び、遂に兵を收けり。

賊將別府新助新兵を以て八代に迫る事

是時ふ當り、賊將別府新助鹿兒島の新兵を督し、八代の背
 後に迫るるを、然るに我軍寡少にして、其八代に駐防する
 りの、僅に一中队に過ぎり、けきとも、六日、黒田參軍各旅團長

と本營に會し、議して曰く、我軍兵寡くして、前後の賊に當
 るに足るを固より、我軍の熊本の圍を解し、急なるの、今の
 策を爲すに宜く、全力を一方に擧げ、後面を顧みず奮進して
 熊本に達し、べしと、山田少將高島少將俱に此議を可し
 けきとも、之を川路少將に堅志田に報し、少將其險を弃
 て退くに忍び、參軍の令再び至るに及で、漸く之を肯せり、
 さる程に參軍へ、また安田權大書記官と八代に遣り、其士
 族を募り、賊の迫るに備へし所、適黒川大佐兵を率て至り
 たり、乃第二旅團の兵を分て、八代の應援とす、七日、八代
 此軍、猥川を隔て、賊と戦ひ、相引くこと退きしが、時別府

新助率る所の兵日奈久より八代に迫るの報ありけし、駐防の兵守備と嚴し、て之を待久時、山田大尉、手島中尉、兵一中隊、大砲二門を以て、長崎より八代に抵き、久河村参軍も、亦高瀬より來り、黒田参軍も會し、軍議を畢て、還き、久八日、別府新助兵千五百人と以て、八代に迫り來り、我兵邀へ撃て、利あり、遂に賊兵進で、八代を圍む、我兵激戦して、之を走らせ、賊は退て、古麓の山間を保て、久此時、永田少佐、井上少佐、各一中隊を率て、松橋より赴き、援ひ、岡澤中佐も、亦八代に赴き、遂に参軍本營と宇土に移り、け

熊本籠城苦辛の事

爰に熊本城の防禦堅固にして、陥らば、七木山鹿の軍の漸々に進み、背後の軍も亦宇土に至り、けき、賊兵前後を顧て、力と城攻に専ら、まゝること能はず、惟壘を環らして、圍み攻るのこ、又其兵の足ぎると以て、坪井川を引て、城の西北に灌ぎ、城兵をして出ることを得ざらしむ、坪井川の城は西南に在り、往古に藤清正曾て其臣に遺言して曰く、事あるの日、此城を守らば、宜く坪井川を塞で、西北に灌ぎ、敵をして迫づらしむ可らむと、今や賊兵之を反用して、城兵の來襲を防ぎ、城兵も亦之に依て、西北を慮ることあり、

是時、當り城中の糧食既乏く、日、援軍の至ると待、
 に、田原植木の賊強梗、して能く防ぎ、相持、ること數旬、
 ありとも、未だ城下、不達せざり、是、於て、戰時、四飯の制、
 と改め、減、して三飯とあり、軍人の食朝、粥、と用、晝、夕、の
 二次、米、粟、或、麥、を加、る、ものと用、文官、及び、武官の
 幕中、不在、て、自ら、奔走、せ、ざる、を、これ、に、粥、二次、と定、む、或、城
 兵の夜、乘、り、て、食、を、城外、に、索、る、もの、に、槍、を、以て、燒、土、を
 突、き、埋、る、所、の、米、麥、等、を、獲、て、之、を、城中、に、收、め、以て、糧、食、の
 欠、乏、を、備、へ、り、又、兵、卒、中、に、大、工、鍛、冶、酒、造、等、の、諸、職、人、あ
 り、是、を、以て、豆、を、得、ま、り、豆腐、と製、し、麥、を、得、ま、り、飴、を、製、し、

皆、之、を、病院、に、送、り、以て、患者、の、食、を、供、せ、り、曾、て、一、兵、卒、酒
 糟、を、城外、に、獲、り、酒、造、職、之、を、以て、燒、酎、數、升、を、造、り、大、に
 其、効、あり、又、滋、養、品、の、傷、者、に、與、る、もの、あり、と、患、ひ、兵、卒、數
 人、城、の、堀、に、入、り、鮒、鯉、の、類、を、捕、へ、之、を、病院、に、送、り、者、あり、
 或、ハ、消、舎、に、於、て、草、鞋、を、造、り、杯、を、造、り、若、辛、名、狀、を、ぐ、り、ら、び、
 將、校、も、亦、志、と、守、備、の、策、を、專、め、或、ハ、砲、壘、を、毀、つ、れ、鍊、鉤、
 と、製、し、或、ハ、敵、陣、を、燒、の、投、火、器、を、造、り、之、を、用、て、皆、能、く、其
 効、あり、上、に、將、校、より、下、に、兵、卒、に、至、る、まで、守、城、の、念、斯、に、
 如、く、堅、く、と、雖、糧、食、日、に、匱、き、と、告、げ、餘、り、所、僅、に、十三、日、を
 支、ふ、べき、の、く、さ、き、に、將、士、竊、り、突、出、の、議、を、定、け、る、所、既、に

一と宇土の方位ふ當て、砲聲あると聞き、背後の軍漸く近づくと知り、其議と止けるが、七日ふ及で此軍未だ達せざれば、是ふ於て再び突出の議と決せり。

奥少佐熊本城に圍を突て宇土に達せし事

斯く八日の曉天、奥少佐一大隊を率ゐ、城を出て安巳橋の賊と衝き、又別々一大隊を出して、賊ふ當らむ時、大霧あつて咫尺と辨ぜざらん、賊の哨兵之と悟らば、我兵鯨波と揚て賊壘に迫り、賊支ふこと能はば、器械を棄て走り、奥少佐之ふ乗じて橋を渡り、疾く馳て水善寺村に至りけるが、別軍も亦之に繼いで、九品寺に至り、賊將坂田

諸潔の、其部下の安巳橋に潰しを聞き、馳て之と整んとし、けり所途中、流丸脚に中りけり、漸く扶けらるるを退けり、賊の諸隊の、城兵の突貫せしを知り、之と尾撃せしむる、我別軍之と知て、其背と搦むる、賊顧て之と闘ふ、其間に奥少佐の、中牟田村と過ぎ、賊の十二壘と撃破て、御船街道の、途中烟と擧て、城兵に報に、緑川と渡り、隈庄に至り、宇土の軍に偵察兵に遇ひ、夫より櫻山に循て宇土に達せり、賊と捕らるる、六名我兵の死傷は僅に三名あり、さして城中の別軍の、奥少佐の既ふ遠きと謀り、尚進て白川の岸に戦ひ、賊壘數十を抜き、逃ると逐て階子渡に至り、對陣しけ

奥少佐大霧
乗とて賊の圍と
突貫さるの圖



るが、午後三時、兵と收て城不入まゝ、此時米七百石と九品寺村に獲て、之と城中に輸送せし。是日黒田參軍、高島少將、伊東少將と共に、木原山に登り、俯して地理を按トけり。が、遙一隊の兵、我哨線に近づく者あり、念らく賊兵來まゝと、斥候兵と出して之と視せしむるに、須臾にして還り報トて、つゝ敵にありに、奥少佐、城兵と率わ圍を衝て來まゝありと、是に於て、諸將山を下り之と本營に迎へ、城中の狀と問まけり。答て曰ふやう、糧米尚二十日と支ふべし、獨り藥品は欠乏と患るのこゝと、乃其勞を慰らんと、大に進撃の部署と定め、十日と待て、諸道より併せ攻んとせらるけり。

七木山鹿の軍連に賊の數壘と破る事

時ふ七木の軍、九日、石翼と進めて木留に迫りけるが、まづ山砲二門を射て、賊窟を焼けしむ。我兵火の起ると望み、齊く小銃と連發して突進し、午後二時過し、木留の後面に出で、山上の賊壘を攻掛ると、賊兵必死に防げども、我兵屈せぬ内薄して、既ふ半腹に至まゝ。比賊兵山巔より下り射て、勢尤も厲し、さても我兵仰ぎ攻て却りば、劇戦暮に至て、終ふ木留と抜こゝと得む兵と收て守地を復せり。原倉の軍、賊兵の曉と冒して、小山より來襲まゝと、邀へ撃て遂に之と走らせし。是日島津珍彦、同忠、欽、島津家の家令内

田正風有村國彦山本孫四郎等と隨へ鹿兒島より西京（さきま）に
 著されり、十日、七木の軍攻撃と止て進び、山鹿の軍に大
 斥候兵と廣瀬に出入り、火と賊窟に縦て虚勢と張り、別の一
 隊として、菊地川に沿て隈府に進へり、めけり、賊兵狼
 狽し守と捨て走り、我兵之に乗じ、其巢窟と焼き、まゝ進で
 石川村の賊據と攻て勝を退て守備と張を久しり、るに隈
 府の敗兵に、遁まて久米の賊に合し、將に南田島と襲んと
 せり、我兵早くも其報と得て、之と途に邀へ撃て、大に賊
 兵と破り、之と斬り、之と捕ふること甚だ多し、十一日、木の
 葉の軍に、大に守備と修て、荻迫の賊に對し、山鹿の軍に、死

士三十人と擇び、日暮に及て、潜り火と鳥の栖に賊窟に縦
 て、十二日、木留の賊拂曉に乘じて、我陣と突んとし、我兵
 之と察し、賊の未だ壘と出さず、及て、銃砲と連發し、けを
 ば、賊兵遂に進むこと能はず、南田島に軍も、未明に兵と分
 て、左右より進み、右軍に石川村に至り、左軍に城村に至り、
 期と刻して、共賊壘と突けり、賊兵禦ふこと能はず、守
 と捨て走り、けをば、我兵數十壘と陥とて、之に據り、植木
 口、軍も、亦三中隊と遣て、石川村の兵に應援せり、別
 一中隊と小野村に出し、賊壘と略して、石川山と取んとし
 て、勝た、より、その進撃と止む、十三日、七木山鹿の軍、も

前日の地位と固く守て妄進も賊兵も亦敢て出む相
對して十五日に至りける。

宇土の軍川尻大進撃の部署と定る事

却説過了九日、宇土の軍ハ兵と休て進む、その日、片岡侍従
勅使として本營に抵り、勅を傳て將士を慰門せらる、將士
以下、負傷者も至らず、物を賜ふこと各次第あり、十日、川
尻進撃に部署と定めける、今、第三旅團ハ甲佐より進
で、御船及び吉野と攻め、別ハ第一旅團の兵と分て、之が應
援とあり、第一旅團ハ隈の庄より進で、上島の渡と衝き、第
二旅團の兵と分て、之が應援とあり、奥少佐率る所の熊本

鎮臺兵一聯隊と以て嚮導し、第二旅團及び黒川大佐の
兵ハ游撃隊と合して、今形の哨兵線と進め、隈の庄より大
渡小岩瀬を経て、緑川の下流に出べしと、諸團奮て其期と
俟り、十一日、まゝ河村參軍來り會し、軍議と畢て還り、是
日、大分縣駐防の警視隊ハ、笹倉ハ陣し、阿蘇南郷ハ郷士と
して、賊情と偵察せしむ、十二日、宇土の軍ハ大ハ諸道より
侯に進ましむ、其部署大略前ハ云ふ所の如し、又山田少將
ハ、部下の死士數十人と選び、前夜小舟數艘ハ乗せて、川尻
小向より、黒川大佐も亦部下の兵と率り、小舟ハ搭して、
川尻小向より、既にして第二旅團の先鋒ハ賊の所候兵

小遇ける所賊の後軍繼で進けり。我兵力戦して之小當
 まらむ。勝敗未だ決せざり。遂に夜明けり。第一第二旅團
 の兵、午前四時吉田口より進み。賊兵防戦すること、
 須臾小く敗れ走りけり。我兵追て、御船館村小
 進入す。賊兵敢て抗せん。守と捨て退きけり。我兵進
 で竹宮小迫き。是日未明坂梨の官軍、進で坂梨嶺の賊
 壘と撃けり。賊兵防戦すること良久し。我兵奮て柵と奪
 ひ。逃ると追て内の牧に至り。賊の輜重若干と分捕まり。十
 三日、賊兵八代と襲ふの報あり。因て宇土の軍より、黒川大
 佐の部下、二中隊と警視隊百餘人小合して、八代小遣て之

小備へ安田權大書記官と長崎縣小派出して、諫早武雄等
 の士族と召募せり。

諸道の官軍熊本城小連絡と通むる事

斯て十四日、山田少將黒川大佐、緑川を渡り、杉島小侵入
 せり。賊遂に敗走し。正午十二時、撃つ川尻と取り、
 山川中佐、右側一中隊と督して、逃ると逐けり。一人
 て防ぎ戦ふ者無き。遂に長驅して熊本城下に至り。此
 時小當て、木留鳥の栖れ、賊軍、日々小退縮し。背後の官軍
 も亦既小迫り、城兵、堅く守て屈せざり。賊軍、三面小
 敵と受け、如何しものまゝことあり。曩に桐野等、其最初熊

本鎮台の百姓原能く何程の事とりぬさん我足一とが舉
バ皆解散せんと蔑視せし由是に至て大に蹉躓しけまば
遂に議と決し退て木山大津に據んとし是日兵と督して
砲銃と連發し四面齊く城と攻るの虚勢と示し徐に軍と
退けんとしてけり城兵斯といはるが賊の砲撃常に倍す
るを見て念ふや彼等死と決して城と抜んとする也と
防禦尤も勉けるが須臾あつて賊砲漸く衰へ遂に其響と
絶せしが城兵に其軍と收て退きしと知むまじく守備と
嚴ふして其状と窺けるが折柄山川中佐の兵城下に至る
と見て城兵思はる賊再び來せりと令と傳て砲撃せんと

も山川中佐呼て曰く官軍あり誤ること勿きと士官令旗
と揮て之と知りむ城兵始て圍の解とて知り門と開て
之と迎へ歡呼の聲城中に満りこの日奥少佐亦先鋒あり
ややく賊の逃ると逐ひ尋て城中に入れり十五日に至り
木留植木鳥の栖の賊兵も自ら火と營に縱て退きけり
我兵その状と察し直に進で之と尾撃せられも賊敢て抗
せざると我先鋒に遂に進で熊本に入る時賊の殘壘
と見ると器械糧食の類に至るまで更に一物と遺さず我
士官等之と見て其退軍の巧ありと賞しけり是日黒田參
軍自ら各旅團と率に藥品糧米酒肉等と輸送して熊本城

入り、將士守城の營と慰問せり、片岡侍従も、亦俱も城
 に入り、勅旨と谷少將以下將校士卒も傳へ、物と賜ふこと
 各差等あり、既もして黒川大佐も属する所の兵と第四旅
 團と改稱せり、十六日山縣參軍自ら各旅團と率て、亦熊本
 城も入り、十七日、遂も總督本營と熊本城中も移りけり、
 官軍兵と分て三面包撃の策と爲す事

勝ば則も蓋世の英雄とめり、負せば則も肝腦地も塗るり、
 能く勝つと制する所の一六勝負ありて、固く百挫せ折り以て、
 兵と擧げ魯西亞と攻て克くべアルルスス於て大に破る

と、いま西郷隆盛が熊本に蹉た跌りして已ま得を退陣せりと
 皆是こあり、さきは是等の人、亦勇悍も長くとて戰畧も短くと
 謂はざると得を閑話休題、熊本の圍既も解け、諸軍も連絡
 と通つ、さき賊軍と攻撃もぐき時ありとめて、十八十九の
 兩日も於て、大に軍議と凝こりけり、是れより先、賊軍ハ木山
 と中央とあり、其右翼ハ白川と境とあり、折て大津に至り、
 前軍ハ竹宮、甘木も連り、左翼の御船も達せり、初め隆盛人
 小語をちり、薩軍の精銳と以て、田原坂の險岨と扼せ、能
 く半年と支たふべりと、しりるふ二旬と出でぎ、官軍も打
 破られ、木留植木の險要と併あて、皆こ之と失はひ、期を所悉く

齟齬一けきば、その熊本で退くも及び、賊將等の議各合に
或の一旦鹿兒島引揚げ、新兵を募るべしと唱へ或の日
向路或の豊後路に退くべしと云ひ、又熊本に戦死をべし
と云衆論頗激ありしが、隆盛を始より沈黙して終ふ一言
を發せむ、衆論の歸する所を任せ、遂に退て木山を根據と
し、兵を大津竹宮甘木御船の四所を分配して、大に防戦の
用意を為し、さうさば官軍の賊の其守線に循て、攻撃の策
を決し、三浦少將は第三旅團を領し、大津より東豊後路に
連り、遙に二重嶺の官兵と相應援し、野津三好の兩將は第
一第二の旅團を領し、本營を竹迫に置き、大津枯木より、川

窪の方面に對し、大山少將は別働第五の旅團を領し、立田
山に陣し、南部渡鹿保田窪に向ひ、樺山中佐兒玉少佐へ熊
本鎮台兵を率て、神水竹宮の賊に當り、山田少將は別働第
二旅團を領して、隈の庄より甘木に向ひ、川路少將は同第
三旅團を率て、堅志田より御船に進み、三面より之を包撃
せん、又曾我少將は第四旅團を將として、軍團本營に
駐るべしと部署既決定しけむ、愈明る二十日を以て大
舉進撃とて決しけむ、

帯山の官軍激戦の事

さくも廿日の未明諸軍攻撃の線に進めける、川路少將

の午前五時自ら兵を督して賊に當り、接戦尤も骨折て第
 九時終に御船を抜き本營に移し、山田少將も亦曉天
 より兵を効し撃て敵兵を敗り勢を乘じて甘木小達や
 うら乃本營を設け、野津三好三浦の三少將に敢て戦
 と需め、唯其守線と固く守り、熊本鎮台兵の砂取より
 神水を経て直に竹宮の賊壘と突けるが、賊兵強梗し
 善く防ぎ、午後不及も未だ之を抜くこと能はざり、賊のその
 戦線の突角保田窪等を出て、下南部に連り、帶山と名づく
 う高臺を據て、砲壘を列ね、穴臺場を作て、官兵の攻撃を防
 ぎ、その近傍に地勢平坦にして、原野廣漠と、惣て山

と呼ぶ岡と稱する所の、多くの密樹の高臺あり、田原木留
 の如き險阻あり、是に於て、五旅團の歩兵は、左右並に
 進で、前面より之を射撃し、砲兵は四斤の山砲並にプロト
 エル煩の著發と連發し、攻撃尤も骨折し、賊勢更不撓じ、
 午前十時を過ぎ、我軍進で漸く突角の賊壘と陥り、されど
 も賊も返撃して之を襲け、我兵支に遂に壘を棄て
 退き、是日曉五時より午後二時不至るまで、激戦更不
 止む、けき死傷は左程多し、ねど兵士大に疲まじ、
 是に於て更不精銳の新手を換へ、齊く賊壘を衝て入り、速
 不之を陥る將士皆大音を呼んで曰く、戦勝りと、勢破竹の如

く掩撃しけりば、賊兵休す崩さるる、先と争て逃奔する、さ
 きに我兵へ火と其兵舎を放ち、須臾ふして悉く帶山の諸
 壘と陷き、お進で火と新南部の賊巢を放ち、逃して逐て
 憤進しけりば、賊兵遁て茂林に入り、まゝ一人あし既り
 て賊の援軍數百人、敗兵を合し、帶山を循て返撃し、我追兵
 の背後へ出て、其不意と襲來する、して我兵の急を顧て
 之を當りし、防戦頗る難く、先を抜く所の壘砲、其半の賊
 の為を奪き、是時不當て、神水口の官軍も、亦大に進み、
 竹宮の賊營を接近し、殆ど之を拔んとて、戦尤も劇き折
 柄、此敗北の為、兵機大に撓み、終に陷ること能はば、賊も

亦夜半、其營を退けり、この夜賊兵三浦少將の守線あり、
 大津町を襲ひし、直に撃て退けり、翌廿一日の拂曉、帶
 山の軍賊壘と攻撃して大に利あり、因て昨日失ふ所の位
 地を盡く復しければ、御船の賊二千餘人も、遂に夜に乘り
 て遁逃せり、是日官軍の死傷百餘人も、樺山中佐村田少
 佐も、亦僅に傷を負けりとも、
 官軍鹿兒島を發向して、朝音と諭す事
 爰に河村參軍、大山少將、高島少將、歩兵六大隊、警視隊二
 大隊、砲兵一大隊、工兵一大隊を率ひ、廿三日、熊本を發し、廿
 五日の午後三時を以て、其將校へ小島より、高雄丸を搭し、

部下の各隊ハ之ヲ春日筑波龍驤清輝の四艦其他テ一ボ
ル號及び三菱の汽船等合せて六艘の船艦不分ち乘り翌
廿六日の午前第二時を以て錨を肥後海に投て鹿兒島に
入り廿七日午後二時諸將校上陸して鹿兒島城に達し諸
隊各その營不就りしが是日雨ふること甚し時官軍の
入城するや直に舊縣官數人と捕縛し之を龍驤艦に送て
悉く糧倉を繋ぎ豫て設けし所の巡查も亦も其職を奪ひ
兵卒並に警視隊を以て巡邏を嚴く爲さしめし蓋し此
輩陰謀情を賊軍に通じ反覆せんことを恐るるあり是よ
り先廿一日鹿兒島縣舊參事田畑常秋ハ事の成さるるを知

り自ら又伏りしを又茲に島津又光父子より縣廳に送
り書を得し其大意は假令政府の軍艦この海港に至
るも能く恭順して命を奉じ方向を誤らざるや縣下
一般の人民へ懇に説諭せんことを求めし即ち是
月廿二日を以て送付せし者あり然るに縣官包で之を縣
下へ公布せし者如し翌廿八日官軍の哨兵を四方
に張り防禦線を定め砲台を城下要害の所に築き肥後及
び日向路の不意に備へ攻撃防禦の準備頗る堅固ありさ
まが三十日に至るまで城下を於て一人の賊を見む又
一發の砲聲を聞かざりし唯縣下の士民無根の妄説を認

られ大に危懼の念を抱くもの多し、時小征討總督の宮より、
令旨と鹿兒島縣小移して之を諭さる、其文曰く、

其縣下嘯集の暴徒曩に熊本に乱入以來、縣下の人心擾

あり、追々兇徒に應じ、終に非命の死に就く者少から

ば、天皇深く之を憂慮し給ひ、親く反正歸順の道を開

きんが、勅使を被差立候處彼等毫も之を悟らば、彌

暴威を逞らせんと欲すと雖、遂に挫折して今日の敗血

み及ぶ此に於て熊本縣下と去り日州と經て其縣下

歸久再び良民と害まらぬ憂ありんも計り難し付今般

更、陸海軍の兵員を派遣し、以て人民の安寧を保護し、

正路に歸せしむるの御趣意に候條、一般の人民疑念あ

く、各職業と營い、決して動搖せざる様至急管下へ漏ら

く諭達可致事

明治十年四月廿三日

且又河村參軍大山少將より、親く士民に諭さる、朝旨の在

る所を以て、士民妄に隆盛を信ぜり、りの多く、人々

皆謂ける、西郷の一人に足と擧て北行せしより、捷報日

に至り、未だ曾て敗軍の説と聞か、是官軍の我を欺くあら

んと、或は憤り、或は疑ひ、相率て逃亡するに至り、抑鹿兒

島の地より、城山に其中央あり、東海と隔て櫻島に對し、

南の甲突川と帯び、西の城が谷と接し、北の淨光明寺より、東の福が城及び磯の濱に連り、鹿兒島城の即城山の麓にあり、縣廳の城外の南部にて、私學校のその北にあり、縣治此事に至りて、舊官吏の捕縛せらるゝもの多くして、新任の縣官の未だ至らば、是を以て仁礼海軍大佐、仮に縣令に事務を擔當せり、

賊兵矢部を退き二道に分ちて潰散せる事

却説廿一日以後、熊本方面の賊は、大津木山御船等の地に於て、一兵を殘さず、矢部に向て退きしが、我軍の其模様を探偵し、進撃の策を決せんとも、抑矢部の地より、四圍皆

山ありて、南一方を除くの外、進軍の路なき絶險の一要所なり、賊は此地を據り、漸く都の城に入り、薩隅日咽喉を扼し、以て天下を勝敗を争ん、けり、廿五日、各旅團の兵は、次第に矢部の周圍を繞りて進み、兵氣大に振ひけり、賊は又矢部を退り、是日、静間中佐は、西京に赴き、蓋し戦狀を奏せり、廿六日、熊本城中より大に軍樂を張り、將士の勞を慰り、將士皆云ふ、賊兵めぐる攻むるの日に當り、幕中より三味線と彈に僅に守城の勞を遣り、比に其心と悦む、如何をやと、歡を極て止む、是より軍を休て、廿八日、至る時、賊軍の更なる策を變じて、



矢部より
入吉み越え
熊路の圖



其新築せし砲壘を棄て日向へ走り或は入吉に據て固く
之を守り曾て戦を接せたりは惟廿九日の未明賊兵數
百再び菅村より出たの報あり我兵馳て至るに既一人を
見む最初賊兵の矢部と退くや二道に分れて潰散しけり
其一の濱町より馬見原を過て日向の國境に入り高千
穂の山脉を踰え三田井宮水を経て延岡に達せんといふ又
一の山路を過て間道より入吉に達せんといふ入吉の道路
も尤も險危より葛を攀ち棧を渡り人馬並び行こ
と能くた僅か一條の樵路あるのみ大抵賊の強壯なる者
は皆道と此より取り傷者及び軟弱なる者悉く延岡に向

て走りしとて人吉に抵るの險は實に九州に冠する四面
を多山脉重疊し殊に矢部より一は行軍をなすの路あり然
るに賊兵は此險を凌ぎて以て遁く亦其強兵とて知れ足
るに越て五月二日川路少將は別働第四旅團を率て堅志
田を去り轉じて八代方面に向て進けり佐敷より三太
郎峠の險を踰え直に薩摩に入り出水阿久根に突入せん
とてしりけり

岩村縣令士民を撫諭する事

同き二日曾我少將は部下の兵四大隊及び砲工其他附属
の兵を率ひ熊本を發し小島より瀛船を以て鹿兒島に赴

久是より先三月廿一日、四等判事岩村通俊、鹿兒島縣令
 不任ざらざるは、是日、鹿兒島に達し、即日縣治の事務を著
 手し、令を出して任に赴く由を告げ、隆盛が兵を擧るの
 名義をまよと諭し、歸順のりので招撫し、裁判廳を開き、陸軍
 の駐防の人民保護に恩旨を出ると告知する等、二日、
 て布達の數第十號、及び或の慰め或の諭し、人心を
 和平に歸せしめんとするの、周く到らざる所あり、然る
 は鹿兒島の士民に更なる朝旨を解せず、疑懼の念交を至る
 物品と他方へ移し、悉く門戸を閉ぢ、市中閑然として、恰も
 人あきか如し、蓋し鹿兒島の土人に、往年英國船と戦て接

へし、已後耳曾て銃砲の聲を聞ざると、以て偏に我軍
 の駐防に駭愕せし、亦勢の然らしむる者、似たり、既に
 して賊兵加治木に據り、此報あり、清艦直に之に赴き、
 更に賊兵の影を見、或に云ふ蒲生に在りと、我兵の日
 々砲壘を築き、胸壁を修め、全軍銳氣を養て、賊の來ると今
 や遅しと待りけり、初め賊徒の鹿兒島を出るや、常不敗軍
 と隠し、捷報を其郷里に傳へ、はるばるの訛言行を或に
 云ふ熊本鎮台既に陥り、長驅して大坂に達し、荻山口も之
 不應まると、又云東國に在る、山形縣の士族遙に兵を擧て
 薩軍の至ると待り、偶我兵告る、賊の敗状を以て、是も敢

て之と信せば、疑惧の念愈固し、時、島津久光郎を儀の別
莊、移せり、とぞ、

賊兵鹿兒島の官軍に迫る事

斯て翌二日の未明、曾我少將、第四旅團の歩兵、四大隊砲
兵、一大隊工兵、一大隊と率て、鹿兒島に達し、東伏見宮も、亦
至まり、先、河村大山、高島諸將の率て、此に在る所の見兵
凡六千餘人と俟せ、總計八千三百四十九人あり、是、前夜報
あり、賊徒漸く鹿兒島と襲ふの勢あり、是、日午後、亦至り、
果して賊兵數人、武村の山路に出没せりと認め、是に於
て、我軍の兵を勅し、部署と定て、來襲に備へしが、時、亦市

民の遁るるりの益多く、家毎に人ぬき、至るるに翌五日
に、早天賊兵、水神坂の方面より來り、進み、城山の背後に
出、攻撃し、巉岩絶壁を攀て、我壘に迫りけるが、我兵恐る
る色あり、砲壘に據て堅く守り、賊の近づくを待て、一齊に銃
砲を下し射て、數十人と殪りけり、追はば、追はば、慄悍の賊兵、
これ、敢て之に當ること能はば、死者と棄傷者と踰て奔去
り、その西田村より來襲せり、兵に、我軍川を隔て防ぎつ
つ、連ね、大小砲を撃射しけるが、賊進むと能はば、退
きけり、我兵進で防禦線外の人家に放火し、以て賊巢を
一掃せり、その火勢、天に沖り、黒烟地を捲て、賊此に足に駐

こと能ては、終に大に敗走せり、賊は終始砲戦と好むた
 ぐ虚に乘り、短兵接戦と試ん、屢其隙を窺、我兵
 敢て之に應ず、其進むと待て、銃砲と激射し、けき
 渠等志と逞り、まゝること能は、我兵更に死傷あり、是
 日午前九時、強雨大に至り、風勢尤も烈し、時、東北の防禦
 線を守り、其方面に障る所の民家、放火せ、故、焔烟
 雨脚と衝て、黒雲に接し、延焼すること六日、至り、其慘
 毒の状實、いふべからず、午後及び戦少く、休むされ
 とも、砲聲未だ断た、四時、至り、我軍艦清輝、號の甲突川の
 下流に在り、頻に大砲と射撃せり、と、賊兵、さう、之に應

ず、遂に日の暮ら、爰に大沼少佐が、引率する所の別手
 組の時、こそよけきと、暗に乘り、岩崎に在り、賊兵と突き
 短兵急に接戦し、賊十一人と切倒せり、又我兵の常、賊
 に出没せりと見たり、否、直に之を放射し、けき、砲銃の聲
 乍、時、絶ることあり、是より先、賊の人吉、據る
 や、官軍鹿兒島に入、此報を聞き、忽ち地その策を變、兵を
 分て二と、一は、大隅に向ひ、一は、薩摩に向せり、其大
 隅に出る、りの人吉、より加久藤吉松、栗野横川、溝邊加治
 木、到り、濱市敷、根福山の海岸に沿ひ、日向あり、都の城、此
 天險に據り、薩摩に向ふ、りの北、肥後の國境、牛山

の險や取り窪田大村蘭牟田や經て蒲生吉田等も出て以て鹿兒島や圍んもん、是に於て官軍の配兵、河村參軍大山高島曾我の三少將もて、十八大隊餘の精兵を率ひ鹿兒島もあつて賊も應じ山縣參軍及び谷少將、熊本も在り、野津三好三浦山田の四將、各其方面を守り、川路少將、曩も警視隊を率て八代口も出けるが、長驅して日奈久佐敷水俣と過ぎ、肥後の境を踰て、薩摩の米澤も達し、又阿久根より西方高木水引もいで、川内川を踰て、向田串木市來伊集院より、賊巢を一撃せん、

近世太平記三編卷之中 尾



